生の意向をもとにして発行名義人は守随一君にし、 した。編集委員は専ら木曜会の中心メンバーがあたりました。大藤、桜田、大間知、 編集所、 発行所も彼の自宅で、月二回ないし三回の会合をしま 倉田 (一郎)、 杉浦、

それに私などでした」、60と回想している。

互いに没交渉の「郷土研究」と一線を画するために、 組織の成立に伴って、「郷土は手段なのでありまして」「研究物体は日本人の生活そのものであ」ることを強調し、 を載せている。世話人の顔ぶれは東京の木曜会の中心メンバー、そして民俗学研究が活発な地方の有力研究者であ った。 柳田 民俗学」という言葉の使用を勧めるようになった(6)。 『民間伝承』一九三五年十月の第二号に会名、目的、会報、会員、会費、世話人などの項目からなる「本会小規 |東京の木曜会||地方世話人||地方民俗研究団体という日本民俗学の組織上の特徴を現している。 柳田は意図的に従来使われてきた「郷土研究」に代わって

# 日本民俗学と中国――『旅と伝説』と『民間伝承』から

2

### 『旅と伝説』の位置

俗誌として民俗学の普及と研究の発展に重要な役割を果たしていた。 学色の強い一般誌で、民俗学に関係する特集などが編まれていたというものに留まっている(ਓ)。 俗学研究では、特定テーマに即した事例報告の資料集としてしか使用されておらず、学史上での位置づけも、 月も抜かさずに読通したものは私にも他には無い」(⑥と言わしめたこの雑誌はその名がよく知られている。 誌は一九二九年『民族』が休刊して以降、一九三五年『民間伝承』が創刊されるまで、柳田の指導の下で中央の民 通巻一九三号まで、ほぼ毎月に刊行していた。柳田国男に「この雑誌の如く、初号から終刊まで十六ケ年以上、一 『旅と伝説』は一九二八年一月の創刊号 (図1) から一九四四年一月戦時下の統制によって自主休刊を宣言する しかし実際 従来民

鉄道省の本意は、 せられている 八月から東京市神田 ることがわかる。 旅と伝説』 す。 と共にその支持と隠れたる伝説の研究に努めたいと思ひます。その方法として読者諸君に伝説 て保存しようとする、 余りに、 それにつれて吾々 號刊創 民謡、 泰西物質文明に陶酔した揚句誇るべき我大和民族固有の面 「郷土紹介 は、 観光案内のような雑誌にして、 風俗、 区西今川町五番地に移転) 萩原正徳(窓)を編集発行兼印刷人として東京市京橋区尾張町二-二〇にある三元社 これがために一 名物、 民衆的なものはありませんでした。それで本誌はその意味に於て全誌面 名所旧跡記事やそれに関した写真等)を募集します。 部の識者は伝説保存のために奔走されつつありますが、 三元社 發行 東京 から発行され、 『旅と伝説』 創刊号 (1928 鉄道の利用を宣伝する方針だったらしい として広い意味での伝説や写真を重視してい すなわち雑誌の目的は 日本固有文化への回 (後略 カ<sup>3</sup> <sup>69</sup> 、

の祖先が残して呉れた尊い芸術や伝説も次第に滅亡に瀕してゐるのを真に遺憾に思ふ次 伝説民謡並に写真募集」の知らせを見れば、『旅と伝説』が最初から違う志向を持って 鉄道省から補助金を受けて創刊したものとされてい 目が刻々失はれんとしつつあるのであ 各地の人々が相集まつ [を開放 同誌創刊号に載 (広い意味に解 (一九二九

図 1 年1月)表紙

う学問的な役割を持ち合わせた性格が想定されており、 も「一部の識者」つまりエリートによる上からの行動ではな して伝説の蒐集という啓蒙的な役割とそれに関する研究とい この募集は、 各地の人々による「民衆的な」運動をめざしている。 『旅と伝説』 の立場や特色をよく表してい . る <sup>70</sup>。 帰にあ ŋ しか

#### 『旅と伝

各号より

れておらず、

民俗学と共通項を持つとはいえ、

基本的に文学 必ずしも貫か

が、

しかし初期の内容からみれば、

その趣旨は

#### 柳田国男

表2 柳田国 説』寄稿本	
年別	本数
1928 年	4
1929 年	3
1930年	8
1931 年	3
1932 年	2
1933 年	9
1934 年	7
1935 年	1
1936 年	3
1937 年	2
1938 年	1

出典:『旅と伝説』 作成。 にすべきかに付いて大家の意見を発表致す積りです。 で、「来月号には皆様が伝説を研究なさる上に其扱ひを如何 しかしその状態は長く続かなかった。 創刊半年後の 中略 七月号

的なものや好事家的なものが多かった。

対象の範囲も拡大していく方針を示している。これらの動きを積極的に支持した「大家」とはすなわ へ大いに発展して行くべく準備して居ります」との編輯後記が見え、本格的な研究への意欲

ち柳田国男であった。

が強くなり、

此外郷土芸術の各方面

並びに写真募集」として再び登場し、「何に限らず研究上有益な物、 八月号に、 (舞踊、 造形)」「余り知られて居ない各地の方言、 柳田の「木思石語」 の連載第一回が始まり、 コトワザ、 しばらく姿を消した募集の知らせは 謎」「珍らしい土地の紀行文」などについて募集を 又世間に知られて居ない物」、そして「郷土芸 「伝説、

た (表3を参照(型))。 究(②)から、一九三三年からの「年中行事調査標目」(③)など精力的に寄稿し続けていた(表2参照)。それだけでは その後、 第一回目では、「口碑」「体碑」「心碑」という民俗事象の分類を提言しており、後の三分類への模索を始めていた。 口碑」という用語が加えられたのは、 執筆者として中山太郎や早川孝太郎などを紹介し、地方での人脈を生かして多くの特集を企画、 柳田 |国男は一九二八~一九三〇年初めに「木思石語」など伝説の研究(イ)、 柳田の文章と呼応している。 前述のように、 一九三〇年以降の昔話 柳田はこの 「木思石語 編集してい 0) 研 0)

「旅と伝説」 の柳田 の寄稿依頼は前からあった(元)が、 柳田の寄稿は一九二八年八月が初めてであった。 実はそ

表3 『旅と伝説』郷土玩具以外の特集一覧

特集テーマ	掲載号数	刊行年月	柳田の寄稿
昔話特集	4 - 4	1931 年 4 月	「昔話採集者の為に」
婚姻習俗特集	6 - 1	1933年1月	
誕生と葬礼特集	6 - 7	1933 年 7 月	「生と死と食物」
盆行事特集	7 - 7	1934年7月	「神送りと人形」
昔話特集	7 - 12	1934年12月	「昔話の分類について」
民間療法特集	8 - 12	1935 年 12 月	
食制研究特集	9 - 1	1936年1月	「食制の研究」
昔話特集	14 - 5	1941 年 5 月	

出典: 『旅と伝説』 各号より作成。

三元社出版単行本一覧 表 4

1929~30年	菅江真澄著・柳田国男校訂『真澄遊覧記』
1930年	日本放送協会東北支部『東北の土俗』
1930年	室谷邦夷『極北秘聞』
1931 年	佐々木喜善『聞耳草紙』
1933 年	喜納緑村『琉球昔噺集』
1933 年	日下承二『人間は二也』
1936 年	中市謙三『野邊地方言集』
1941 年	田村栄太郎『板倉伊賀守』
1941 年	山下謙一『山西通信』
1942 年	野間吉夫『シマの生活誌:沖永良部島採訪記』
1942 年	柳田国男『木思石語』
1942 年	宮尾しげを編『風俗画報綜覧』
1943 年	宮武省三『九州路の祭儀と民俗』

団体・

研究家の活動

全国

の民俗学活動の連絡役 出版物を紹介し、 どを通して、

地方研究

に交歓台、新刊紹介な 筆陣に取り入れ、 ユーゼアムの学者も執

3 執

さら

出典:『旅と伝説』各号広告、新刊紹介より作成。

は一九三一年十月号か を務めていた。三元社 ら隔月に南島談話会の 旅と伝説』に併載し、 一終刊していた『民俗 九三二年数ヶ月間 「南島談話」を

日

があった折口をはじめとする国学院大学や、高橋文太郎などアチック 同時に、『旅と伝説』 は、 当時民俗学会の一件で柳田国男との間に 確

の注意を促し、その論旨に合わせて読者からの報告を求め、 柳田の活動や出版物の最新情報を随時報告するなど、

常に柳田国男を中心としていた。

の前

模索し始めたが、それと同時に、 の七月、 『民族』 三 – 五 への寄稿を最後に、 『旅と伝説』に自分の足場を移したのである。『旅と伝説』も、 柳田はその編集から離れ、 孤立の中で民俗学独自の理論や方法を 柳田の文章に読者

第1章 日本民俗学の成立期と中国

図2 中国関係記事変化図

出典:『旅と伝説』 作成。表紙、新刊紹介、後記などを含む。1943年までは 1944年は1号。 各年12号、

決して軽視すべきではない。

民俗学が世間一般に普及するにあたって『旅と伝説』が果たした役割は を見せた一九四四年でようやく二〇〇〇名を越えた(で)ことを考えれば できる。民間伝承の会の会員数は会が創立されて十年後、驚異的な増加

長編 柳田 究』(一九三五~三七年) 俗学運動の最大の発信地であり、 九三五年『民間伝承』発刊以前、 旅と伝説』 九三五年 の民俗学論考の主要な発表の場であり、 の活動を支えた中央誌としての地位を有していたといえよう。 は柳田国男主導のもとで創刊されたものではなかったが、 『民間伝承』 が出版され、『旅と伝説』 が発行されてからも、 同時に 柳田の大きな影響と支持のもと、民 『民族』と『民間伝承』の間に 「一国民俗学」 三元社から『昔話』 は山村調査の報告や 0) 枠を堅く 研

守ろうとする『民間伝承』と異なる独自な立場で、

日本における民俗学

手した (表4参照)。 0)

体の五分の二にあたるという。当時の読者は凡そ二五○○名前後と推定

名の名簿が載せられたが、十二月号の編輯後記によれば、これは読者全

一九三〇年四月号から十二月号にかけて、

長期購読者として計九

四九

編集も引き受けてい た。 同時に民俗学関係の出版にも次々に着

# 2 『旅と伝説』における中国記事

見られ、さらに停刊前の一九四三年に二〇本を超えピークに達したことがわかる(図2参照)。 三一年(五本)、一九三七年(十本)以外低い数値で推移しているが、一九三九年を境に急速に増え、毎年十数本も で『旅と伝説』に掲載された中国関係の記事(表紙、新刊紹介、後記などを含む)の本数を年別に整理すれば、 日本民俗学と中国の関わりをまずこの『旅と伝説』に即して見てみよう。一九二八年一月から一九四四年 月ま — 九

### ■清洲への移総

文章の最後にこう書かれている。

民俗学関係ではないが、 『旅と伝説』 において最初の中国への言及は第二号の大笹吉次郎 「切符の話」

以上 の話は日本国内の話ですが、満洲地方へ旅行さる、方の便法として日満連絡の切符があり、遠くは中華民 アジア連絡の切符まで制定されてゐます。芸術に国境なくと言ひますが、 切符にも国境がなくなつ

洲が中国でも日本でもない地域という認識は一般に広がっていった。 会計を本部から独立させた。記念すべき日露戦争の 勢力を拡張していった。一九一二年にジャパン・ツーリスト・ビューローは半官半民の非営利的な旅行斡旋機関と できた上、ロシアから東清鉄道の南半分の鉄道と付属権利を譲り受け、関東州の租借権を獲得し、 して発足したが、同年十一月満鉄の運輸部内にビューロー大連支部が設立され、さらに一九二六年に規模を拡大し 時は一九二八年であり、 満洲は中華民国の領土であった。しかし日露戦争の結果、日本は朝鮮半島の権益を確保 戦跡地として、さらに鉄道や観光旅行などの制度によって、満 以降、 満洲での

洋」として「ヤートル」と「サイパン」から一名ずつ会員の名前が記されている(?)。 て満洲からも「安東県池田義雄、 一九三〇年一月から四月までの会員名簿には、 大連市岡操、 奉天市北畠栄太郎、 日本以外の地域の会員は、 営口菅野九十九」 朝鮮から十一名、 満洲は当時植民地であ の四名が見られ、 台湾から十名、 他に そし った

台湾と朝鮮に次いで、密接な関係がある地域であった。

隣同志がどうしてかういがみ合はねばならぬかを悲しむ」とふれている<sup>(②)</sup>。 などにはまったく言及せず、一九三三年三月号で初めて「外では国際連盟問題が喧しいが、この皮膚の色の 『旅と伝説』の編輯後記は学問以外の社会・政治情勢についてよくふれているが、 しかし満洲事変、 満洲 同じな 国 ]建国

告、「日満支交通統一なる」や「日満支の輸送強化」などの交通関係記事(81)などを含めて中国関係の内容が一気に は少なかった。しかし一九三九年一月太田陸郎の投稿「進軍中にみた支那習俗」を皮切りに、 九三八年には桑江常夫の「満洲の履物」(二月)と小寺融吉「満支ところどころ」(十月)以外、 満洲事変の時にあまりそれにふれなかった『旅と伝説』は日中戦争勃発の直後、 早速それに言及した(8)が、 中国関係出 中国に関する内容 版物 の広

といえる。それに対して、 た。一九三九年から一九四四年までの中国関係記事約八○点のうち、 九三九年以前の中国関係記事計三七点のうち、満洲関係は二三点にも上り、 一九三九年以降満洲以外の記事が大幅に増え、 満洲関係は十点未満であった。 満洲の占める比重は次第に低下していっ 満洲への関心は圧倒的に強か つた

## ■藤原相之助の比較的視線

七~一九四七年) に関する仙話」、 満洲についての記事が多い中、 であった。藤原は秋田県生保内の生まれで、医者であり、 九月「おしら神考証」など、満洲以外の中国について積極的に投稿したのは藤原相之助(一八六 一九三〇年十一月「絵姿女房につき」、一九三一年二月「奥州の仙人伝説 『河北新報』 の主筆を務め、 東北の郷土

史研究家として名が知られている(&)。

して日本、中国、 が多いやうです」⑻と昔話の相似を指摘している。そして「おしら神考証」では、以下のように民族移動を背景と 伝説と、 藤原の投稿は常に比較的な視線を持っている。たとえば「絵姿女房につき」では、藤原は「中部南部支那の民俗 日本のそれとには、どつちが元祖か或ひはどつちも元祖ではないのか、その点は分りませんが、 朝鮮との民俗比較を唱えている。 相似たの

れと遡つて行くと、極東に於ける民族転移の事跡と、その各民族固有の当初の習俗とを伺ふことが出来る(※)。 兎も角も今の朝鮮や支那から日本へ渡つて来て帰化したものも、日本から支那朝鮮地方へ行て子孫を残したも 案外に多く、 しかもそれは所謂書契以前からであるらしい。(中略) これを仔細に還元してそれからそ

じたことがあつた。 私は先年支那の浙江地方を歩いて居た頃、その俗信の、我が東北地方のそれに近似して居ることをつくづく感 し、之と対比すべき朝鮮方面は忙しい旅行を続けたので採訪の余裕もなかつたが「おしら神」ばかりでなく、 唯々それ等のことを詳しく記した地方誌料を手に入れることが出来ぬので其の儘にした

を、 間伝承の会に入会しており(を)、『民間伝承』にも日本東北の民俗について会員通信などを寄せているが、その比較 その後、 中国の神話と関連付けて考察している。そしてかつての歴史背景としての民族移動という主張も一九四二年以 藤原は再びかつて提示した課題を取り上げ、『遠野物語』以来、民間信仰史の一大テーマである「オシラサマ」 いろいろの民俗研究に於て、将来開拓すべき方面は差当り支那と朝鮮とにあると思ふ(8)。 しばらく関連する論考は見えなかったが、一九四〇年六月の「馬蚕神話の分布 の強調という形では再び登場するようになる(8)。 藤原は一九三五年十月に早くも宮城県から民 -オシラ神との関係

日本民俗学は外来の影響

継承されてい

桑江常夫『旅と伝説』投稿一覧 表5

掲載年月	表 題	備考
1936年9月	「満洲習俗娘々祭」	1936、5、2、煙台にて
10 月	「満洲習俗『焼紙』」	
12 月	「『由比、伊比、結ひ廻る』の語源」	1936、7、煙台にて
1937年2月	「満洲と琉球の習俗 (一)」	
3月	「満洲と琉球の習俗(二)」	1936、6、満洲、煙台にて
4 月	「満洲の迎春行事」	1937、2、16、煙台にて
8月	「帝政ロシアの蒙古調査」	
6月	「満洲の葬礼習俗」	1937、3、21、煙台にて
12月	「満支と琉球の竜神思想」	
1938年2月	「満洲の履物」	

出典:『旅と伝説』各号より作成。

こと以外、多くは知られていない。

桑江については当時煙台在住、

沖縄の歴史と文化に詳しいという

彼は投稿の第一

弾

「満洲習俗

一桑江常夫の満洲・琉球風習比較

誌『孟姜女』の受贈 七月に勃発した日中の全面戦争と無関係なことであり、 かった。一九三七年には十本を数えているが、 満洲事変以降の数年間、 (三回)以外は、 中国関係の内容が劇的に増えることはな ほぼ満洲に関する文章を多数 しかしこれはこの年

中国の民俗

寄せていた桑江常夫という人物の活躍によるものであった (表5参

入り 習との比較を行っている。ここで示されている実体験に基づく写真 えて、 長い大石橋の状況を、当年六月七日春季例祭に参加した経験を踏ま では九五箇所といわれる「娘々祭」の中、 娘々祭」では「土俗研究はまつたくの畑違ひ」と断っており、 の紹介や、 口絵を含め六枚の写真を入れながら記述し、 沖縄との関連への注目などの特徴は以降の投稿にも 最も規模が大きく歴史が さらに沖縄の風

44

研究の提言や文章などに対して

『民間伝承』

はまったく反応を示さ

なかった。

を極 満洲において日々進行していた生活の「日本化」についてしばしば言及している。「満洲習俗娘々祭」の最後に彼 力排除 し、「日本固有」 の一面を見るのに対して、 桑江はまず現実を見ようとしている。たとえば、 彼は当時

はこう述べている。

事に郷土色を忠実に遺存して居ると思はれるものが少なく、神体は別として替身人、土製人形、 生活に大影響を与へつつある事は争へない事実です。何れその事に就いては後に書き度いと思ひます(88)。 娘々祭は大体以上の様なものです。此の祭は満洲で郷土色の最も豊かなものとして知られて居ますが、 食料品位のもので、他は大部分日本品か、或はその影響を受けて居ます。食料品 品ですがその主要原料である麦粉は、是又日本品が多いのです。(中略)とにかく日本の商 (飯品の) も出来上りこそ 品 農具其他二三 満 驚いた

な靴)、ゴム靴、 その後、「満洲習俗『焼紙』」では「日本商品」との一節を設け、 玩具仮面、ボロ古着などを取り上げてい 衣類、反物、 アサヒ靴 (黒布製の運動靴のよう

的に無視し、 そしていわゆる「琉球文化」には大陸的な要素が濃厚に認められるが、当時日本の「南島研究」ではそれを意図 もっぱら「日本文化の原型」として捉えようとしていた。満洲を参照軸としている桑江はそのような

姿勢を厳しく批判している。

究するための一段階として真に有意義な事で、これなくしては琉球の古代文化史の全面的研究は不可能 従来の琉球古代文化史の研究は主に日本との比較研究に限定されて来た。それは琉球古代文化史を全 がそのために日本的なもののみが琉球文化であり、 琉球の古代文化が直に日本古代文化であると 的 に研

考へる事も又不可能である。故に琉球諸島に現存する古代文化を以て直に日本の古代文化を律し、それを再現

45 第1章 日本民俗学の成立期と中国

として厳しく批判した。 まった。桑江の合計十本の投稿のなかでは、唯一『民間伝承』で取り上げられたのはもっぱら日本のことを論じた 記事にはまったく関心を示さなかった。桑江のこうした日本民俗学にとって重要であるはずの批判も無視されてし 「『由比、伊比、結ひ廻る』の語源」であった。そこで桑江は琉球などの例をあげて日本語の「ユヒ」は支那 ·徭役」が語源であることを説いている。一九三七年二月 『民間伝承』 二-六で、橋浦泰雄はこれを安易な語源説 柳田を中心とした日本民俗学は『旅と伝説』と密接な関係を持ちながら、そこに載せてい る内地以外の

ることなく、一九三八年二月を最後に『旅と伝説』からも姿を消した。 その直後の四月に桑江は「南満洲」 から民間伝承の会に入会した(๑)が、 しかし『民間伝承』にはつい

# 3 『民間伝承』における中国記事

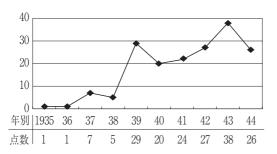
争という現実を学問の対象から切り捨てたのである(空)。 努めて之を排除せねばならぬ」<sup>(3)</sup>という厳しい批判を受けて一気に姿を消していった (表6参照)。日本民俗学は戦 護札の心意を論考することを以て、この学術当面の課題・貢献と考へるが如き愚かなる偸安と末梢的なる流行とは は、日本各地の戦争関連の民俗事象が関心の所在であった。しかしそれは倉田一郎の「かかる時代には千人針や守 との関わりは理論上必要ではなく、一九三五、三六年中国関係の記事がほとんどなかったことはその現れである。 日中戦争が始まってから、積極的ではないが戦争関連の記事が現れてきた。最初の段階では中国との関係より 『民間伝承』は「一国民俗学」のための機関誌として、国内の収集、整理、分類、比較こそが課題であり、

九三八年十一月の『民間伝承』四-三では「学の基礎となるべき資料を全国的に洩らすなく蒐集する」ための

『民間伝承』戦時下習俗関係記事

号数	刊行年月	登載欄	執筆者	表題・内容
2-12	1937年8月	会員通信	神戸・山田良隆	「千人結び」
3-1	9月	会員通信	栃木・榎戸貞治郎	「弾丸除」
3-1	9月	会員通信	東京・鈴木棠三	「鉄砲祭」
3-1	9月	編輯雑記	大藤時彦	大間知篤三「千人針」(『東京 日々朝刊』)の紹介
3-2	10 月	会員通信	秋田・寺田伝一郎	「神様の出征」
3-4	12月	会員通信	東京・鈴木棠三	「事変と信仰」
3-5	1938年1月	会員通信	下総・篠田定吉	「日支事変と俗信」
3-5	1月	会員通信	島根・岡義重	「千度参」
3-5	1月	学会消息	近畿民俗学会	戦争を中心とする習俗も話題
3-7	3月	会員通信	東京・安江正一	「千社詣」
4-1	9月	問題と資料	栃木・榎戸貞治郎	「風祭」
4-6	1939年3月	巻頭言	倉田一郎	「時局下の民俗学」

出典: 『民間伝承』 各号より作成。



『民間伝承』中国関係記事変化図

出典:『民間伝承』各号より作成。会員通信、新刊紹介、後 記などを含む。1935年は4号、1943年は11号、1944年 は7号。

おり、 係の内容が大きく増加してきた。そして『旅と伝説』 方 『民間伝承』においても、 一国民俗学」の基礎作りを急いでいる。

長野県五郡、愛知県八郡、 かけが見える。そこで「未だ会員を有せざる郡名」として 最終網」を確立すべく、 埼玉県六郡、 神奈川県三郡、 全国各郡単位の会員獲得の 石川県二郡、 一九三九年を境に中 千葉県八郡をあげて 福井県八郡、 呼び の場 国 関

県三郡、

えた 肩上 停刊にてピークを迎 が (図3参照)。 りに増加し、

九四〇年以降年々右 合と同じように、